

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷十三第

行發日一月四年五和昭

論 叢

家屋税の課税標準 法學博士 神戸 正雄

貨幣數量説について 文學博士 高田 保馬

經營學と經濟學 經濟學博士 小島昌太郎

時 論

配給組織の合理化と中央市場の單複制 經濟學士 谷口 吉彦

說 苑

統計學に於ける二つの傾向に就いて 經濟學士 蛭川 虎三

ボーレの恐慌理論 經濟學士 靜 田 均

雜 錄

英蘭銀行の職能 經濟學士 有 井 治

月賦信用の特質 經濟學士 今津 正二

カッセの價值論廢止と價格問題の取扱 經濟學士 高 森 晋

相關係數の意義 經濟學士 益 田 熊雄

酒税の立替 經濟學博士 汐 見 三郎

近着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

經營學と經濟學

小島 昌太郎

一、經營學と經濟學との關係——二、經濟と經濟學との混同せられたる意味の Political Economy——三、科學としての經濟學と實學としての經濟學——四、古き意味の經濟學から經營學の分離——五、國民厚生學と經營學

一 經營學と經濟學との關係

經營學 (Betriebslehre) と經濟學 (Wirtschaftslehre) との關係については、この二つの學問は、別々の獨立の學問であるといふ見解と、前者は後者の一部門であるといふ見解とが各々存在する。經營學が經濟學とは別な獨立の學問であるといふ見解についても、兩者は、それぞれ別個の科學であるといふ見方と、それぞれ別個の實學であるといふ見方と、また、前者は實學であり、後者は科學であるといふ意味に於て、別々のものであるといふ見方とがあり得る。

また、經營學なるものを以て、經濟學の一部門であるといふ見解も、そのいはゆる經濟學を以て科學と認むる場合と、實學と認むる場合とによつて、更に二つに分れ得る。即ち、經營學を以て、一つの科學である所の經濟學の一部門と見る見解と、一つの實學である所の經濟學の一部門であ

るといふ見解との二つである。

經營學と經濟學との關係については、凡そこの五つの見解があり得ると思ふ。こゝに、私が科學といふは、人間が事象の本質を——事象の眞實を——知りたいといふ欲求から呼び起されて出來た知識の體系であり、實學といふは、人間が、何等かの目的を達成するにつきそれに役立つ所の知識を持ちたいといふ欲求から呼び起されて出來た所の知識の體系である。一つは、事象の眞實を闡明する所の學問であり、他は、何等かの目的に役立てんがための學問である。¹⁾ 故に、私のいふ科學は、英語の Science または pure Science 獨逸語の Wissenschaft または reine Wissenschaft 若しくは、人によりては theoretische Wissenschaft としはるゝものに當るのであるが、實學といふは、英語の Practical Science 獨逸語の Kunde 若しくは Kunstlehre または學者によりては praktische Wissenschaft としはるゝものに略に當るものであるから思ふ。

さて、經營學と經濟學とは、いづれも科學であつて、而も別々の獨立のものであるといふ見解をなすものとしては、先づ、Nicklisch の著 “Wirtschaftliche Betriebslehre” 第六版を擧げることゝが出来る。即ちその冒頭に “Neben der Volkswirtschaftslehre steht heute die Betriebswirtschaftslehre. Im Mittelpunkt dieser Wissenschaft steht die Unternehmung, der Betrieb.” としはるゝものゝ即

1) 本誌、第三十卷第一號、「經營學の本質」參照

ちこれである。

更に、この書物の第一版である所の“*Allgemeine Kaufmännische Betriebslehre als Privatwirtschaftslehre des Handels (und der Industrie)*”に於ては、經營學を次の如くに説明して、これを一つの獨立の科學と見る見解を明かにして居る。

Sie (Privatwirtschaftslehre) ist die Lehre von den Tatsachen und räumlichen wie zeitlichen Tatsachenzusammenhängen, die das Leben der Privatwirtschaft ausmachen. Sie ist danach eine wissenschaftliche Disziplin im strengen Sinne des Wortes; keine „Technik“, wie viele annehmen, keine Kunstlehre, welche die Regeln angibt, die befolgt werden müssen, wenn der grössmögliche Profit erwirtschaftet werden soll.)

私も、經營學と經濟學とは別々な獨立の學問であるといふ見解をとるものであるが、その理由は、前述の *Nickisch* と全く異なるのであつて、經濟學は一つの科學であるけれども、經營學は一つの實學であるが故に、この二つは別々の學問であると見るのである。Diehl も亦、彼が、私經濟學なるものを論じたるなかに、經營學なるものに論及しつゝ、次の如くに言つて居る所を見れば、その結論に於ては略ぼ私と同じ見解をとるやうである。それは、*Diétrich* が *Schnollers Jahrbuch*, 1913 に載せたる „*Begründung einer Betriebswissenschaft*” を題する論文に於て、經營學なるものは、經濟學の一部分であつて、經營といふものゝ本質、構成、機能に貢獻する所の理論部面であるといふ見

1) a. a. O. S. 4.

解を述べたるに對する、彼の次の批評文のうちに表はれてゐる。

Ich glaube nicht, dass der Vorschlag von Dietrich auf Zustimmung hoffen kann, denn dasjenige, was Dietrich in seinem Schema der Betriebswissenschaft bietet, ist entweder rein technischer Natur, gehört also in die Technologie oder in die technische Ökonomie, oder soweit es sich um volkswirtschaftliche Betrachtung handelt, in die theoretische Nationalökonomie bzw. die Gewerbepolitik. Die Wirtschaftswissenschaften sind umfassend genug, und wir haben gar keinen Anlass zu wünschen, dass sie noch weiter spezialisiert werden oder wesensfremde Elemente in sich aufnehmen sollen.)

尙ほ Schmalenbach が Zeitschrift für handelswissenschaftliche Forschung, 6. Jahrg. 1912 に發表したる “Die Privatwirtschaftslehre als Kunstlehre” に於ては、そのうちなる Privatwirtschaftslehre は、今日いふ所の經營學に當るもので、この學問が如何なるものであるかといふことの同氏の見解は私のいふ所の實學と略ぼ同様のものに當ると見ることが出来る。

經濟學を以て一つの科學と認め、そして經營學はこの科學たる經濟學の一部門であるとする見解は、曩に紹介したるが如く、²⁾ Lehmann や Leitner や、また、今 Diehl の批評の對照として述べたる Dietrich のところである。

これらの三つの見解については、私は、既に本誌上に發表した「經營學の本質」並びに「經營學の意義」と題する二つの論文に於て、これを紹介し、且つ詳細に論評した所である。³⁾ として、私

1) Diehl, Theoretische Nationalökonomie, Zweite Aufl. (Jena 1922), I Bd., S. 112.
2) 本誌、第三十卷、第一號、「經營學の本質」參照
3) 本誌、第三十卷、第一號及第二號

の見る所によれば、若し經營學を以て一つの科學であると認むるならば、それは、經營事象の本質を闡明せんとするものであるから、今日に於ては、結局、科學としての經濟學の一部門としての外にはその意義なきものであり、また、經營學を以て、經濟學とは別な獨立の學問であるといふ見解をさるならば、それは、一つの科學としては存立するの根據なく、經營に役立つ所の知識の體系であるを見て、初めて、その意義を見出し得るものであつて、然る場合には、その經營學は明かに一つの實學であると見るのである¹⁾。

然るに、こゝに残る所は、經營學を以て、一つの實學であると見るにしても、經濟學も亦、私のいふ所の實學であると見る見解がある。この見解に従ふときは、經營學は、また、その意味に於ける經濟學の一部門であるといふ見解と、その意味の經濟學とも異なる別な實學であるといふ見解とが存在し得る。

本論に於て、私はこの見解に對して検討を加へんと欲するものである。そして、これは、或意味に於ては、經營學の何たるかの問題を離れて經濟學そのものは一つの科學であるか、または私のいふ意味の實學であるかの検討でもある。

二 經濟と經濟學との混同せられたる意味の

Political Economy

1) 本誌 第三十卷第一號及第二號

經濟學が如何なる學問であるかについては、今日に於ても、二つの見解が分れて存在して居る。第一は、この學問は經濟事象の本質を闡明する所の學問であるといふ見解である。第二は、この學問は、國民の、若しくは人類の物的福祉の増進を目的とする所の學問であるといふ見解である。即ち第一の見解は經濟學を以て一つの純然たる科學と見るものであり。第二の見解はこれを私のはゆる實學と見る見解である。

私は、この第一の見解をとる。そして、Liefmann が “Die Volkswirtschaftslehre hat zur Hauptaufgabe, die komplizierten Vorgänge des wirtschaftlichen Lebens zu erklären, die sich daraus ergeben, dass alle Menschen, nicht nur eines Volkes oder Staates, sondern letzten Endes in der ganzen Welt durch den Tauschverkehr aufs engste miteinander verflochten sind.”¹⁾ といふ、また “Die Aufgabe der Wirtschaftswissenschaft in ihrer Gesamtheit ist also die Erklärung der wirtschaftlichen Erscheinungen in allen ihren Beziehungen.”²⁾ といふ居る所は、やはりこの見解をとるものである。

併し乍ら、沿革的にこれを見れば、經濟學は、いはゆる經濟事象の眞實を闡明せんとする學問として喚び起されたといはんよりは、むしろ、人間がその物的幸福を増進するに役立つ知識を獲得し若しくはこれを供給せんとする欲求によりて喚び起されたもので、従つて、この學問は、國民

1) Liefmann, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, S. I.

2) A. a. O., S. 182.

若しくは個人の物的幸福——富——は如何にして増進すべきであるかの研究をなすものであると考へられた。

先づ一七六七年にその初版が發行せられたといふ Sir James Stewart の “An Inquiry into the Principles of Political Economy. Being an Essay on the Science of Domestic Policy in Free Nations.” の MDCCXCVI 年版を見るに、經濟といふことは、彼にあつては、人の集團が今日の言葉でいへば、合理的に生計を營むの行動である。彼の言葉を以て言へば “Economy in general is the art of providing for all the wants of a family, with prudence and frugality”¹⁾ である。そして彼によれば、この Economy なるものの二つある。一つは private family のそれであり、他は state のそれである。彼は private family の Economy について次の如くに言ふ。

“The object of it, in a private family, is therefore to provide for the nourishment, the other wants, and the employment of every individual²⁾ The whole economy must be directed by the head, who is both lord and steward of the family.

It is however necessary, that these two offices be not confounded with one another. As lord, he establishes the laws of his economy; as steward, he puts them in execution.³⁾

この private family に於ける Economy にあたるものが、國家の場合に於ては Political Economy である。彼によれば、private family はその首長たるもの、計畫に従つて構成し得らるゝものであるが、國家の場合には、それは既に一定の構成に於て存在して居る。従つて、Political Economy

1) James Stewart, op. cit., Bk. I, p. 1.

2) op. cit., p. 1.

3) op. cit., p. 2.

の大きな仕事は、その物資調達の一々の運用を國民固有の諸事情に適合せしめ、且つその固有の諸事情を改善して一層その生活に有效なる制度を齎らすことである。彼は、これを次の言葉で説明して居る。

What economy is in a family, political economy is in a state: with these essential differences however, that in a state there are no servants, all are children: that a family may be formed when and how a man pleases, and he may establish what plan of economy he thinks fit; but states are found formed, and the economy of these depends upon a thousand circumstances. The statesman (this is a general term to signify the head, according to the form of government) is neither master to establish what economy he pleases, or in the exercise of his sublime authority to overturn at will the established laws of it, let him be the most despotic monarch upon earth.

The great art therefore of political economy is, first to adapt the different operations of it to the spirit, manners, habits, and customs of the people, and afterwards to model these circumstances so, as to be able to introduce a set of new and more useful institutions. 1)

Sir James Stewart にありては、かくの如く Political Economy のいふことは、國民全般としての適當なる生活を得しむることの意味であるが、更にそれは、また、同時にこの適當なる生活を得しむることに關する學問でもある。併し、このいはゞ經濟と經濟學との同視は、たゞに Stewart だけに限つたことではなく、單に Political Economy をいふ場合に於ける英吉利の學者の用例は、この兩

1) op. cit., p. 2. 3.

者のいづれを指すのであるから多くは明瞭ではない。故に、この點を明かにせんとする學者は、態々、Art of Political Economy と Science of Political Economy とらふ言葉を用ゐて、この兩者の區別を明かにして居る。Steuart は、併し尙ほこの區別を明かにすることなく、前掲の文章に直ちに引續いて、學問としての Political Economy なるもの、目的を示して次の如くに言つて居る。

The principal object of this science is to secure a certain fund of subsistence for all the inhabitants, to obviate every circumstance which may render it precarious; to provide every thing necessary for supplying the wants of the society, and to employ the inhabitants (supposing them to be freeman) in such a manner as naturally to create reciprocal relations and dependencies between them, so as to make their several interests lead them to supply one another with their reciprocal wants.¹⁾

これによれば學問としての Political Economy なるものは、——或は Political Economy の學問は、といふが正當であらうが——國民に、そのそれぞれの國家的社會的事情に適應して生活を營むことを得しむるを目的とする學問である。故に、それは、私のいはゆる實學——或目的を達するに必要な知識の體系——の性質のものである。そして、具體的には、各國いづれもその自然的社會的政治的等の條件を異にするがため、それは、また、それぞれの國情によつて異らざるを得ざるものである Steuart も亦このことを明かに認め、次の如くに説明して居る。

If one considers the variety which is found in different countries in the distribution of property, subordination of classes,

1) op. cit., p. 3.

genius of people, proceeding from the variety of forms of government, laws, and manners, one may conclude, that the political economy in each must necessarily be different, and that principles, however universally true, may become quite ineffectual in practice, without a sufficient preparation of the spirit of a people.

It is the business of a statesman to judge of the expediency of different schemes of economy, and by degrees to model the minds of his subjects so as to induce them, from the allurements of private interest, to concur in the execution of his plan.)

Stewart のこの見解に従へば、Political Economy は、國民全般をして適當なる生活を營むべきを得しむることであり、また、それに關する學問である。かくる見解は、Stewart の前掲の書物より九年後に出版せられた、かの有名なる Adam Smith の “An Inquiry into the Nature and causes of the Wealth of Nations” に於ても、表明せられて居る。即ち、その Book IV, Of System of political Economy の Introduction に於て、次の如くに説明されてゐる。

Political economy, considered as a branch of the science of a statesman or legislator, proposes two distinct objects: first, to provide a plentiful revenue or subsistence for the people, or more properly to enable them to provide such a revenue or subsistence for themselves: and secondly, to supply the state or commonwealth with a revenue sufficient for the public services. It proposes to enrich both the people and the sovereign.¹⁾

この説明だけから見るに、Adam Smith が Political Economy のらふものは、國民並びにその政

1) op. cit., p. 3, 4.
2) Cannan's Edition, Bd. I, p. 395.

治團體に對して、如何にすれば十分なる收入若しくは生活資料を供與することを得るかを研究する學問であるを見るものといはねばならぬ。それ故に、この見解に従へば、Political Economyは、或る目的を達するに必要な知識の體系より成るもので、即ち私のいふ實學の一つである。Henry Sidgwickも亦、私を略は同様に之を解し、¹⁾ “Still, notwithstanding the gulf that separates Adam Smith's economic doctrine from Stewart's, he is equally decided in regarding Political Economy as a study with an immediate practical end.”²⁾ といつて居る。この a study with an immediate practical end といふものは、³⁾ といふも直ち私といふ實學である。

前にも述べたるが如く、Political Economy といふことは、一方に於ては、或目的を達するための行動的事實——Stewartによれば providing for all the wants といふやうな行動的事實、Smithによれば、to provide a plentiful revenue or subsistence といふやうな行動的事實——を意味し、他方に於ては、かゝる行動的事實を實現するに——かゝる目的を達するに——必要な知識の體系を意味するものである。即ち、或る目的を達せんとする所の行動的事實と、この目的を達するに必要な知識とを混同して、この言葉を以て言ひ表はされて居る。そして、Smithも亦、その例に漏れなからずは、Wealth of Nations の或る個所に於て、the great object of the

1) Henry Sidgwick, The Principles of Political Economy, 3rd Ed. (1924), p. 16.
2) Cannan's Edition, Vol. I., p. 351.

political economy of every country, is to increase the riches and power of that country 又述²⁾、また前掲の文章に引續く所の次の文章に於て、system of political economy 又(1)又、system of commerce または system of agriculture とを同視する點に表はれて居る。即ち曰ふ。

The different progress of opulence in different ages and nations, has given occasion to two different systems of political economy, with regard to enriching the people. The one may be called the system of commerce, the other that of agriculture.¹⁾

英吉利初期の經濟學者はかくの如く、Political Economy なるものに國民若しくは、政治團體に、その必要とする物資を得しむるといふこと、これを得しむるに必要な知識の體系たる學問といふ意味とを併せ含ましめて居るけれども、姑くその後の方の意味のみを分離せしむるときは、Political Economy なるものは、國民若しくは國家その他の政團に、必要な物的資料を十分に獲得使用せしめんとする目的を達するに必要な知識の體系といふことになる。然るときは私のいふ所の經營學はこの意味の經濟學の一部門である。いな、然る意味に於ては、その Political Economy なるものは、とりも直さず、私のいはゆる經營學に外ならぬものといはねばならぬ²⁾。

三 科學としての經濟學と實學としての經濟學

1) Cannan's Edition, Bd. I., p. 395.
2) 「經營學の意義」本誌第三十卷第二號、参照

といふ意味を混同して Political Economy に與へたものである。然るに私の見る所によると、Senior が Political Economy を science と認めたのは、theoretical science の意味に於てあり、これを Art of Political Economy と區別したのは——Senior はこの言葉を用ゐて居ないが——これをむしろ practical science の意味に於てなしたものである。即ち、彼はむしろ實學としての經濟學と、科學としての經濟學との區別を認めたのである。そして更に進んで、彼は科學としての經濟學が本當の經濟學で、實學としてのそれは他の學問、彼の言葉によれば、Science of Legislation に屬するものであるといふのである。その説を引用すれば次の如くである。

We propose in the following treatise to give an outline of the science which treats of the Nature, the Production, and the Distribution of Wealth. To that science we give the name of Political Economy. Our readers must be aware that that term has often been used in a much wider sense. The earlier writers who assumed the name of Political Economists avowedly treated not of Wealth but of Government.¹⁾

The questions, To what extent and under what circumstances the possession of Wealth is, on the whole, beneficial or injurious to its possessor, or to the society of which he is a member?—What distribution of Wealth is most desirable in each different state of society?—and, What are the means by which any given country can facilitate such a distribution?—all these are questions of great interest and difficulty, but no more form part of the science of Political Economy, in the sense in which we use that term, than Navigation forms part of the science of Astronomy. The principles supplied by Political Economy are indeed necessary elements in their solution, but they are not the only, or even the most important

1) Nassau William Senior, Political Economy, 4th Ed. (1858), p. 1.

elements. The writer who pursues such investigations is in fact engaged on the great science of legislation; a science which requires a knowledge of the general principles supplied by Political Economy, but differs from it essentially in its subjects, its premises, and its conclusions. The subject of legislation is not Wealth, but human Welfare. Its premises are drawn from an infinite variety of phenomena, supported by evidence of every degree of strength, and authorizing conclusions deserving every degree of assent, from perfect confidence to bare suspicion. And its expounder is enabled, and even required, not merely to state general facts, but to urge the adoption or rejection of actual measures or trains of action.

On the other hand, the subject treated by the Political Economist, using that term in the limited sense in which we apply it, is not Happiness, but Wealth; his premises consist of a very few general propositions; the result of observation, or consciousness, and scarcely requiring proof, or even formal statement, which almost every man, as soon as he hears them, admits as familiar to his thoughts, or at least as included in his previous knowledge; and his inferences are nearly as general, and, if he has reasoned correctly, as certain, as his premises. But his conclusions, whatever be their generality and their truth, do not authorize him in adding a single syllable of advice. The business of a Political Economist is neither to recommend nor to dissuade, but to state general principles, which it is fatal to neglect, but neither advisable, nor perhaps practicable, to use as the sole, or even the principal, guides in the actual conduct of affairs. To decide in each case how far those conclusions are to be acted upon, belongs to the art of government, an art to which Political Economy is only one of many subservient sciences; which involves the consideration of motives, of which the desire for Wealth is only one among many, and aims at objects to which the possession of Wealth is only a subordinate means.¹⁾

The confounding the science of Political Economy with the Sciences and Arts, to which it is subservient, has seduced Economists sometimes to undertake inquiries too vague to lead to any practical results, and sometimes to pursue the legi-

1) op. cit., p. 3.

minate objects of the Science by means unfit for their attainment. To their extended view of the objects of Political Economy is to be attributed the undue importance which many Economists have ascribed to the collection of facts, and their neglect of the far more important process of reasoning accurately from the facts before them. We are constantly told that it is a science of facts and experiment, a science *avide de faits*. The practical applications of it, like the practical applications of every other science, without doubt, require the collection and examination of facts to an almost indefinite extent. The facts collected as materials for the amendment of the poor-laws, and the opening of the trade to China, fill more than twice as many volumes as could be occupied by all the treatises that have ever been written on Political Economy; but the facts on which the general principles of the science rest may be stated in a very few sentences, and indeed in a very few words. But that the reasoning from these facts, the drawing from them correct conclusions, is a matter of great difficulty, may be inferred from the imperfect state in which the science is now found after it has been so long and so intensely studied.¹⁾

私が、かやうに Senior の説を多く引用したのには、二つの理由がある。その一は、彼が、今日の言葉でいへば、practical science としての経済學と、theoretical science としてのそれとを、明かに區別したことである。その二は、theoretical science としての経済學に關する彼の見解については多くの同意し離き點があるけれども、practical science としての経済學の性質について彼が述ぶる所は、大體、私が經營學の性質について述べたる所²⁾と所見を同じくする所あることである。

1) op. cit., p. 4.
2) 本誌、第三十卷第一號、及第二號

即ち、Senior は、今日の言葉でいへば、theoretical science としての Political Economy が與へる general principles に關する知識を應用する所のものは、science of legislation に屬する所である。この science of legislation なるものは、その前提が perfect confidence な根據をもつ理論からも出來て居ると共に bare suspicion の根據しかもたないものからも出來て居るもので、根本に於て人類の幸福を目的とする學問であり、人類の幸福増進といふ目的を達するに必要な知識からなるものであると見るのである。この、いはゆる science of legislation といふは、文字通りに解せば、立法の學問といふことであるが、その眞意は一つの政策法學のことである。この學問は、結局に於て人類の幸福を齎らすを目的とする所の法律は如何に制定すべきかの研究ではあるが、これを一々の具體的のものについて見れば、共同社會生活に於ける各種の目的を達するための研究であつて、例へば「如何なる程度、如何なる事情の下に於ける富の所有が、所有者並びに社會に有利なるかを見て、かゝる程度を定め、かゝる事情を齎らすためには如何なる法律を制定すべきか」、「富の如何なる分配が社會の各階級に最も望ましいかを研究して、かゝる分配の行はるゝには如何なる法律を制定すべきか」等を研究するのである。故にこれは今日の言葉を以て言へば、經濟政策學若しくは經濟政策法學に當るものである。然るときは、Senior のいはゆる science of legislation なるものは、勿論、科學としての經濟學に屬するものではなく、一つの

practical science 即ち實學たる性質をもつもので、私のいはゆる經營學に屬するものである。

そして、Seniorによれば、この意味の science of legislation 即ち經濟政策學若しくは經濟政策法學には各種の事實に關する知識が必要であつて、“Its premises are drawn from an infinite variety of phenomena”であり、經濟學の知識も亦勿論これに要求せらるゝものであるが、この which Political Economy is only one of many subservient sciences”であるといふ。この點は、いはゆる經濟政策學をも含む所の私のいはゆる經營學なるものが、經濟學は勿論、各種の科學や科學以外の知識より構成せらるゝものであるといふ見解に照應する所である。

次に Senior に從へば、科學としての經濟學はたゞ、general principles を研究するだけであつて、具體的の何等かの目的に役立つことを直接の使命とするものではなく、従つて a single syllable of advice であるもなすべきものでなく、實際問題に對し、neither to recommend nor to dissuade である。これに對して advice をなし recommend をなし、若しくは dissuade をなすは、經濟學やその他多くの科學の知識より成る science of legislation の使命とする所である。——この見解も、經營學と經濟學との關係に關する私の見解に照應する所があるは、私の前に本誌に掲げた二つの論文を讀まれたる讀者の承知せらるゝ所であらう。

1) 「經營學の本質」經營學の意義」本誌第三十卷第一號及第二號

になつてからは、科學としての Political Economy を實學としての Political Economy より區別するために、前者を單に、Political Economy と稱するものは少くなり、或はこれを稱するに Economic Science とし、または簡單に Economics とし、ものが多くなつたのである。そして、實學としての Political Economy 即ち Adam Smith がら得る Political Economy の、いふの proposes to provide a plentiful revenue or subsistence とし、方は、たゞその一部分が、science of economic policy として論ぜらるゝものとなり、その proposes to supply the state or commonwealth with a revenue sufficient for the public services の方は、science of public finance として取扱はるゝこととなつた。

併し、右の如き國民全般のため、若しくは國家のため、その必要とする所の物的資料を、十分に、合理的に、得せしむることに關する學問があり得るとすれば、同様に、一私人が若しくは私人の集團が——一家族、一會社といふが如きものが——その必要とする所の物的資料を如何に合理的に調達すべきかといふ學問も成り立ち得なければならぬ。この一私人の立場に於ける物的資料の合理的調達に關する研究は、それ故に、Political Economy に對して Private Economy として取扱はれ、殊に獨逸に於ては Privatwirtschaftslehre なる名の下に、一つの學問として、Volkswirtschaftslehre に對應するものとして成立した。そして、これは、また最近、急激にその研究が盛

をなして、Betriebswirtschaftslehre または Betriebslehre の名をもつやうになつた。それが、私が問題として居る所の經營學である。

かゝる Science of economic policies も Science of public finance も、また Science of private economy も、その學問的性質を同じくするものであつて、そして、いづれも物的資料を或る目的に最も適合するために合理的に調達することの研究たる點に於て、明かに Science of Political Economy 即ち Economics とは均しく異なる特異性をもつものである。故に、この三者は各々異なるものではなくいづれも、或る一つの學問の各部門と見るべきである。そして、私は、この三者を包括する學問の名稱は、やはり、これを獨逸語でいへば Betriebslehre と名づくべきものと思ふ。何となれば、それらはいづれも、一般的に言へば、人類が一つの指導意思——目的——の下に於て、物的資料の獲得使用をなす所の計畫的行動たるに變りなく、かゝる計畫的行動を會社などの場合に於て Betrieb 即ち經營といひ得べくば、國民全般の場合について見ても、政府について見ても、これを經營といひ得ざる理由がなく、従つて、また、會社に關する前述の學問を Betriebslehre 即ち經營學といひ得べくば、他の二つについても、——その結果、この三者の總稱として、——これを經營學といひ得ざる譯もなく、またかく稱するこゝろが、Science of Political Economy

または *Wirtschaftswissenschaft* を經濟學と稱するに照應して、甚だふるはしいからである。

五 國民厚生學と經營學

經營學と經濟學との關係については、尙ほ、この兩者は、共に、私のいはゆる實學であつて、そしてまた各々別な獨立のものであるのではないかといふ問題が残つて居る。即ち、經濟學は、英吉利に於て十九世紀以來、前述の如く *general economic principles* を研究する所の學問であるといふ見解が成立したけれども、最近に至つては、また、かの前に述べたる。Stewart の *A science "to secure a certain fund of subsistence for all the inhabitants, to obviate every circumstance which may render it precarious ; to provide everything necessary for supplying the wants of the society, and to employ the inhabitants in such a manner as naturally to create reciprocal relations and dependencies between them, so as to make their several interests lead them to supply one another with their reciprocal wants"* といつて見たる *Political Economy* の一脈相通する意味をもつ所の "*Economics of Welfare*" といふ學問を Pigou が提唱し、また獨逸に於ても Amonn が "*Volkswohlfahrtslehre*" といふ學問を論述するやうになつたから、この意味の經濟學と經營學をこつていふも論ずべき問題が残つて居る。私は筆を改めて之を論述しやうと思ふ。——五、三一七——

1) Pigou, *The Economics of Welfare*.
2) Alfred Amonn, *Grundsätze der Volkswohlfahrtslehre*.